

令和 7 年度 兵庫県立大学

S D G s 報告書

2025



兵庫県立大学
UNIVERSITY OF HYOGO

兵庫県立大学 S D G s宣言

兵庫県立大学は、安全で平和な社会の実現のために、そして全世界の幸福と福祉に貢献するために、ここに S D G s宣言を発し、いのちの尊重に根差した人間性豊かな教育と研究を進めるとともに、様々な分野の叡智を結集し、その達成に向けて邁進することを誓います。

人間活動が地球環境を大きく変化させる中、持続可能な社会の実現が全世界の緊切な課題となっています。人為起源の気候変動は激しさを増し、生態系と人間に広範囲な悪影響と損失をもたらしています。こうした地球規模の危機に対処するため、2015年に「国連持続可能な開発サミット」が開催され、国際社会全体の普遍的目標、すなわち「持続可能な開発のための2030アジェンダ」と「持続可能な開発目標（S D G s：Sustainable Development Goals）」が全会一致で採択されました。このうち「持続可能な開発のための2030アジェンダ」は、「Leave no one behind（誰一人取り残さない）」を基本理念とし、世界市民としての自覚と参加を呼びかけています。

兵庫県立大学は、多様な学部、研究科、附置研究所、そして附属 高等学校・中学校をも擁する公立総合大学として、異分野融合を重視した教育・研究を推進し、S D G sの実現に資する人材、すなわち「豊かな人間性、公共の精神、課題探求能力、グローバル・リテラシーを備え、地域や国際社会で活躍できる創造力と自立性を有する人材」の育成に努めています。しかしながら、新感染症のパンデミックや気候変動など、社会状況や環境の変化は、私たちの想像をはるかに超えるようになりました。今や、世界中の様々な地域において環境・経済・社会の持続性は危機に瀕しています。そこで、兵庫県立大学は、構成員すべてがこれまでの教育・研究実践をS D G sの枠組みで深化・発展させ、その総力を結集し、さらなるS D G sの達成に取り組むことを決意しました。

兵庫県立大学は、異分野融合による先端的研究基盤を生かし、特に エネルギー、グリーン・トランスフォーメーション（GX：Green Transformation）、生物多様性、減災などを対象とする分野の研究者が連携することにより、次のような課題の解決に向かいます。

エネルギー問題は、世界が直面している諸課題の核心にあります。雇用、食料生産、安全保障、水資源、あるいは気候変動でさえも、エネルギーの持続可能性と結び付いています。そのエネルギー問題解決のために、GXを駆使するカーボンニュートラルに向けた経済社会システム構築のための研究を推進します。地球環境は、生物多様性を基盤とする生態系から得られる恵み（生態系サービス）により支えられています。人間を含むあらゆる生物と生態系の健康を「ワンヘルス」として捉え、生物多様性の保全に取り組めます。そして兵庫県立大学は、1995年に発生した阪神・淡路大震災を教訓にして減災復興の研究に真剣に取り組んできました。その成果を一層発展させて、環境面や政策面などにわたる全学的な連携に至らせ、人びとのさらなる安全・安心な暮らしの実現に取り組めます。

これらの取り組みを進める鍵となるのが、S D G sのゴール17に掲げられたパートナーシップです。兵庫県立大学は、地域の人々、世界の学術団体、行政機関、企業などと協働しながら社会の課題解決に貢献します。

令和4年3月23日
兵庫県立大学



坂下 玲子

兵庫県立大学・副学長
SDGs推進委員会委員長
SDGs推進室室長

気候変動、生態系の劣化、格差の拡大、頻発する災害など、私たちを取り巻く課題は複雑さを増し、相互に深く結びついています。SDGsの達成期限である2030年が近づく今、目標を掲げるだけでなく、一人ひとりが自らの専門性を生かし、具体的な行動へとつなげることが一層重要になっています。

兵庫県立大学は、2022年に発した「SDGs宣言」のもと、「いのちの尊重」と「誰一人取り残さない」という理念を大切にし、教育・研究・社会貢献を通じて持続可能な社会の実現に取り組んでいます。令和7年度も、学生による主体的なプロジェクトや地域連携活動が一層活発化し、教職員の専門性を生かした学際的な研究も新たな展開をみせました。また、地域・自治体・企業等との協働のもと、環境保全、減災、福祉・保健医療、地域経済の活性化に関する取り組みなど、多彩な実践が展開されました。本報告書には、こうした本学の多様な知と人が結びつき、地域から世界へと課題解決に挑む姿が収められています。

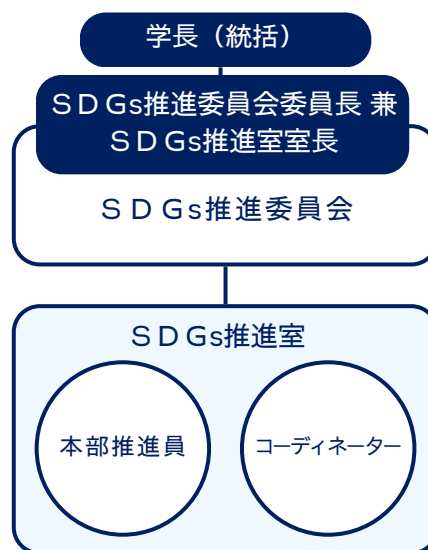
「個と社会のWell-beingに貢献する新たな知の拠点の共創（兵庫県立大学ビジョン2036）」をめざし、今後も学内外の皆様とのパートナーシップを深めながら、未来を担う人材を育み、新たな価値と希望を社会に届けてまいります。本報告書が、さらなる対話と行動を生み出す契機となることを願っています。

兵庫県立大学
SDGs推進室 室長
坂下 玲子

2022年3月に策定した、兵庫県立大学「SDGs宣言」に基づき、
SDGs推進委員会及びSDGs推進室は、本学におけるSDGsを推進しています。

SDGs推進委員会は、各部局長で構成され、本学のSDGs推進に係る意思決定を担っています。その下部組織であるSDGs推進室は、各部局教員の中から選任された本部推進員とコーディネーターから構成され、SDGs関連の取組を推進しています。

- SDGs推進に係る企画、立案に関すること
- SDGs推進に係る情報収集及び提供に関すること
- SDGs推進のための取組及び啓蒙活動に関すること
- SDGs推進に向けた人材育成とすそ野拡大に関すること
- SDGs推進に係る現状分析、評価及び改善に関すること



目次

兵庫県立大学 S D G s宣言	2
S D G s推進室室長ご挨拶	3
S D G s推進体制図	3
目次	4
目次（取組事例 目標 1～目標 9）	5
目次（取組事例 目標 10～目標 17）	6
《各 S D G 毎の取組事例》	
目標 1： 貧困をなくそう	7
目標 2： 飢餓をゼロに	9
目標 3： すべての人に健康と福祉を	10
目標 4： 質の高い教育をみんなに	14
目標 5： ジェンダー平等を実現しよう	16
目標 6： 安全な水とトイレを世界中に	18
目標 7： エネルギーをみんなに、そしてクリーンに	19
目標 8： 働きがいも経済成長も	22
目標 9： 産業と技術革新の基盤をつくろう	23
目標 10： 人や国の不平等をなくそう	27
目標 11： 住み続けられるまちづくりを	29
目標 12： つくる責任 つかう責任	33
目標 13： 気候変動に具体的な対策を	34
目標 14： 海の豊かさを守ろう	36
目標 15： 陸の豊かさも守ろう	37
目標 16： 平和と公正をすべての人に	41
目標 17： パートナリシップで目標を達成しよう	42

頁	取組事例	関連するSDGs																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
目標 1：貧困をなくそう																		
7	不利な立場にある 子どもたちのために	○			○						○							
7	成長・非成長の内生的な発生を中心とした内生的成長理論の研究	○			○				○	○	○							
8	生命保険と「贈与」に関する研究・生命保険企業等に関する研究	○	○														○	
8	公害・災害問題の経験から経済成長と地域社会の望ましい関係を考える	○											○			○		
目標 2：飢餓をゼロに																		
9	持続可能な農村地域を創る		○						○	○		○					○	
9	化学農薬の代替となる殺菌水の開発		○	○									○		○	○		
目標 3：すべての人に健康と福祉を																		
10	声なき声に耳を傾けて			○	○													○
10	高度急性期病院や地方自治体のデジタルトランスフォーメーションを推進			○						○		○						
11	センサIoTで医療事故を防ぐ			○														
11	病原菌のタンパク質から感染の仕組みを知る			○						○		○						
12	Wearable Deviceを活用した健康指標の予測に向けた取り組み			○						○								
12	植物との関わりや緑環境がもたらす人の健康への効果を活用する			○								○						
13	自閉症スペクトラム症を持つ人のための「未来語りのダイアログ」実践モデルの開発			○							○							
13	若い世代にこそ 健康的な環境と食習慣を			○							○							
目標 4：質の高い教育をみんなに																		
14	モノづくりの楽しさを広める活動と技術伝承				○					○								
14	小型爬虫両生類化石の分類学的研究				○												○	
15	小規模校と地域が共創する教育エコシステム				○							○						
15	天文学特に地球外知的生命探査から地球と人類の未来を考える				○										○	○	○	○
目標 5：ジェンダー平等を実現しよう																		
16	SOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）の 多様性の尊重に関する基本方針					○					○							○
16	ひょうご・こうべ女性活躍推進企業に認定					○			○									○
17	AI活用とアウトリーチを融合した家族支援モデルの構築				○	○												
17	ハイリスク妊婦に対する看護支援プログラムの構築				○	○												
目標 6：安全な水とトイレを世界中に																		
18	自治体関係者及び市民と一緒に考える上下水道料金のあり方				○			○				○						
18	地球規模の感染症への挑戦：エボラとコレラとエムボックスの研究				○			○										
目標 7：エネルギーをみんなに、そしてクリーンに																		
19	電力・エネルギー市場における価格変動とリスク管理								○	○	○							
19	資源供給リスクフリー二次電池の開発								○		○		○	○	○			
20	エネルギーの有効利用が可能な機能性薄膜の開発								○		○		○	○	○			
20	持続可能な未来社会を創る電気エネルギー技術								○		○			○	○			
21	産業技術における高圧力の効果								○		○				○	○		
21	エキゾチックな特性を示す電子の探求								○		○							
目標 8：働きがいも経済成長も																		
22	ため池のある暮らしの未来に向けて、市民とともに研究所を設立									○			○				○	
22	産学連携によるリカレント教育				○					○	○							○
目標 9：産業と技術革新の基盤をつくろう																		
23	「放射光×顕微鏡」で社会課題解決に挑む								○		○			○				
23	ニュースバル放射光施設でしかできない最先端科学				○				○		○			○				
24	組織におけるイノベーションの創造				○					○								
24	計算科学による材料の特性解析と新たなデバイスの理論的設計									○				○				
25	小胞体ストレス応答とゴルジ体ストレス応答を軸とした新規創薬戦略の基盤構築				○						○							
25	新規創薬のための試験管内タンパク質合成技術の開発と応用				○						○							
26	大規模言語モデルの内部動作の理解										○							
26	金属含有タンパク質が持つ高機能の仕組みを理解する				○				○		○							

頁	取組事例	関連するSDGs																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
目標10：人や国の不平等をなくそう																		
27	国籍、宗教、文化を超えて みんなが過ごしやすい大学/社会を作ろう！				○						○		○					○
27	企業の国際事業活動									○	○	○	○					
28	誰もが「生き心地のよい社会」へ			○	○	○						○						○
28	公園緑地におけるユニバーサルデザイン			○								○	○					
目標11：住み続けられるまちづくりを																		
29	光都地域交流活性化事業												○					
29	子どもたちの「居場所」づくりのための課題を実践的に探究する												○					
30	災害が起こる前までに、人々の防災力をいかに上げるか			○									○		○			
30	地域資源の活用と保全を通じた持続可能な社会づくり												○			○	○	○
31	災害や感染症等の危機を乗り越える戦略と手法の探求	○		○									○					
31	遠隔手法による庭園設計及び工事監理の効率化												○	○			○	
32	高校、地域と連携した地域防災力向上に貢献する活動			○									○					
32	自動車を活用した超高密度地震観測システム										○		○					
目標12：つくる責任つかう責任																		
33	地域とつくる食の循環「VEGEKOBE」 ～西区産規格外野菜の活用による地産地消推進プロジェクト～		○											○			○	
33	みんなでツナグ！ニッポンの食の未来									○				○			○	
目標13：気候変動に具体的な対策を																		
34	次世代モビリティの電動化システムにおける電気絶縁技術の高度化										○				○			
34	雲と気候を物理で描く：100年先を支える普遍的原理の探求							○					○		○			
35	超水滴法に基づく高精度気象モデルの研究開発										○				○			
35	気候変動による 地域気象の変化を把握し、備える												○		○			
目標14：海の豊かさを守ろう																		
36	未利用資源を用いた微細藻類の培養と二枚貝養殖への適用		○						○						○	○		
36	ユネスコ世界ジオパーク「山陰海岸ジオパーク」の運営と ジオパークのネットワーク活動												○		○	○	○	○
目標15：陸の豊かさも守ろう																		
37	但馬地域の湿地・草地保全活動によるSDGs推進活動																○	
37	みんなで守る兵庫の自然 ～外来種から考える生物多様性～												○				○	
38	播磨理学キャンパスを取り巻く地域の生物の生物多様性の調査・保全												○				○	
38	植物標本のデジタル化・アーカイブ公開と標本データ自動抽出システムの開発													○	○	○		
39	進化の瞬間をとらえる。タンガニイカ湖の生態系研究				○												○	
39	野生復帰が目指すところ												○		○		○	
40	陸上節足動物の多様性生物学				○							○					○	
40	田園生態系の生物を保全する																○	
目標16：平和と公正をすべての人に																		
41	被災地での犯罪予防			○		○							○					○
41	生命中心の視点に基づくアメリカ文学・文化、環境文学研究				○													○
目標17：パートナーシップで目標を達成しよう																		
42	POST×HIA 多文化共生コラボレーションプロジェクト	○	○	○	○				○		○		○	○	○	○	○	○
42	「WHO協力センター」として災害に強いコミュニティ、安全・安心な 社会の構築に向けた国際協力			○									○					○
43	イノベーションサロン			○						○								○
43	明舞まちなカラボ			○									○					○

01

貧困をなくそう

あらゆる場所のあらゆる形態の
貧困を終わらせる

1 貧困を
なくそう



不利な立場にある 子どもたちのために



環境人間学部・環境人間学研究科 乾 美紀・教授

学部では「多文化共生教育」を教えており、貧困、少数民族、開発途上国に暮らす子どもたち、外国につながる子どもたち、性的マイノリティなど、不利な立場にある子どもたちが平等な教育機会を享受するにはどうすればいいか研究しています。また、ゼミ生と一緒に姫路や神戸に住む外国人の子どもたちの学習を支援したり、ラオスに学校を建設する学生国際協力団体CHISE（チーズ）と共に活動をしたりして、子どもたちが質の高い教育を受けることにつながる実践を続けてきました。地域の人たちと協力しながら子どもたちと関わることで、皆の笑顔が増え、私たちも幸せな気持ちに包まれます。学部を問いませんので、皆さんも一緒に活動しませんか？

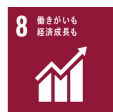
Point

1. 開発途上国
2. 多文化共生
3. 教育支援



山岳地帯の子どもたちとの交流

成長・非成長の内生的な発生を中心とした 内生的成長理論の研究

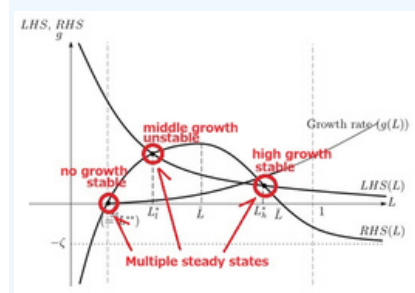


国際商経学部・社会科学部 桑原 史郎・教授

「経済成長は人類を貧困から救い出す強力な経済現象である」という視点に基づき、マクロ経済学的な理論分析を行っています。研究開発や人的資本の蓄積が、長期的な成長や所得分配にどのような影響を及ぼすのかを、数理モデルを用いて解明しています。近年は労働分配率の低下や賃金の二極化といった格差問題にも着目しています。貧困を克服し、持続可能な発展と公正な社会を両立させるための経済的メカニズムを追求し、有効な政策提言を目指しています。

Point

1. 内生的成長理論
2. 研究開発
3. 人的資本蓄積



01

貧困をなくそう

あらゆる場所のあらゆる形態の
貧困を終わらせる

1 貧困を
なくそう



生命保険と「贈与」に関する研究・生命保険 企業等に関する研究

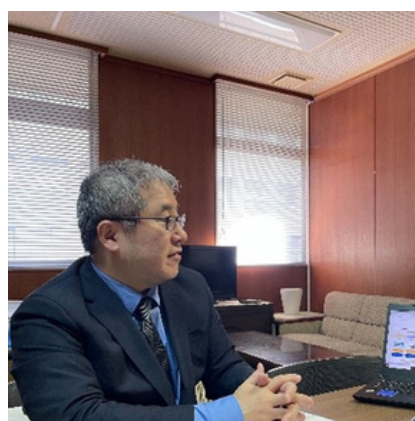


Point

1. 生命保険
2. 保険現象
3. 贈与（純粋贈与）

国際商経学部・社会科学部 田中 隆・教授

生命保険と関連の保険現象の領域を中心に、「贈与（純粋贈与）」の観点から、研究を行ってきました。資本主義社会での我々の生活において、生命保険による生活保障は非常に重要な役割を果たしています。加えて、SDGsの問題背景である広範囲な「負の外部性」、SDGsのある部分の推進で生じることもある「負の外部性」に対しては、「贈与（純粋贈与）」の概念を含んだアプローチによる取り組みが、大きな可能性を有しています。



公害・災害問題の経験から 経済成長と地域社会の望ましい関係を考える

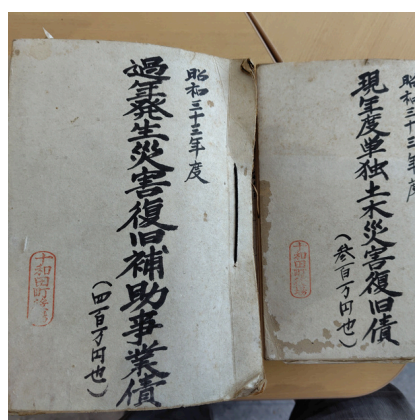


Point

1. 地域社会と経済開発
2. 公害・災害問題
3. 企業の社会的責任と行政の役割

国際商経学部・社会科学部 大澤 篤・講師

持続可能な社会の実現には、過去に経験したことから学ぶことも有効です。社会経済現象の一部には、場所や時間などの条件に拘束されことなく、似たような性質が繰り返し観察されるものがあります。世界各国・地域の経済発展の歴史過程では、公害や自然災害の発生に伴う生活水準の低下に対して、地域社会の様々な対応が起こりました。現在、秋田県鹿角地域を研究フィールドとし、過去の煙害問題や災害対応に注目することで、市場経済の論理では解決しにくい問題について、その発生から解決に至る過程に対して歴史研究の手法で接近しています。新史料の発見・整理からはじめて、経済発展や企業成長の望ましい在り方に関する歴史的教訓の引出しに取り組んでいます。



02

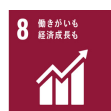
飢餓をゼロに

飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する

2 飢餓を
ゼロに



持続可能な農村地域を創る



環境人間学部・環境人間学研究科 三宅 康成・教授

人口減少と高齢化が著しい農村地域が抱える諸課題について計画的な視点で調査・研究を行っています。農村地域は、自然豊かな空間であるとともに、米や野菜、果樹などの食料を生産する大切な場所であることから、将来にわたって守り続ける必要があります。自然環境、生産環境、生活環境の3つの環境のバランスを考えながら、農村地域の持続的な維持・発展のあり方について皆さんとともに考えていきます。

Point

1. 持続的な農地管理のあり方
2. 地域資源を活用した観光開発
3. 農村コミュニティの再編と地域づくり



農地でのフィールドワーク

化学農薬の代替となる殺菌水の開発



工学部・工学研究科 岡 好浩・准教授

水だけを原料とした人体や環境に安心安全な殺菌水を開発しています。近年、農薬抵抗性病害の出現、化学農薬による健康への影響などの問題から、減農薬につながる新たな殺菌剤の開発が求められています。「キャビテーションプラズマ技術」を応用し、植物病原菌に高い効果のある殺菌水を生成することができます。キャビテーションプラズマ殺菌水は化学農薬に依存することのない持続的農業の実現に大きく貢献できると考えています。

Point

1. キャビテーションプラズマ殺菌水
2. 減農薬技術
3. 持続的農業



03

すべての人に健康と福祉を

あらゆる年齢のすべての人々の
健康的な生活を確保し、福祉を促進する

3 すべての人に
健康と福祉を



声なき声に耳を傾けて



環境人間学部・環境人間学研究科 井上 靖子・教授

私は、臨床心理士・公認心理師として、教育・福祉・医療で
カウンセリングに携わってきました。心の傷や生きづらさを
抱える人々が如何に癒されるのか、カウンセリングの本質を
理論と実践から探究しています。相談者の無意識が動き始
め、自己治癒力が発現していく過程に深い魅力とやりがい
を感じています。さらに人々がより安心して生きられるための
土台とは何か、文化や風土に根ざしたイメージや物語の観点
からも探究しています。

Point

- 1.心の傷や生きづらさを抱える人々の
カウンセリング
- 2.より安心して生きられる
心の土台づくり
- 3.心の癒しをもたらすイメージや物語



児童養護施設で暮らす高校生と
大学生の交流（夢語り合い事業）

高度急性期病院や地方自治体の デジタルトランスフォーメーションを推進



社会情報科学部・情報科学研究科 竹村 匡正・教授

社会情報科学部と情報科学研究科では、最先端の研究を進め
るとともに、これらの知見を実際の社会の現場に還元するこ
とを重要視しています。そのため、私たちは実際の病院にお
いて電子カルテ等の情報システムの導入の企画や調整、また
自治体におけるICTを用いた新たなあり方の検討に参画し
ており、学生の皆さんとともに国立循環器病研究センターや
神戸市立医療センター中央市民病院等の実際の医療機関での
DX推進を進めています。

Point

1. 社会の現場に寄り添った
デジタルトランスフォーメーション
2. ICTやデータサイエンスによる
医療DXのあり方の検討
3. ICTやデータサイエンスによる
行政DXのあり方の検討



03

すべての人に健康と福祉を

あらゆる年齢のすべての人々の
健康的な生活を確保し、福祉を促進する

3 すべての人に
健康と福祉を



センサIoTで医療事故を防ぐ

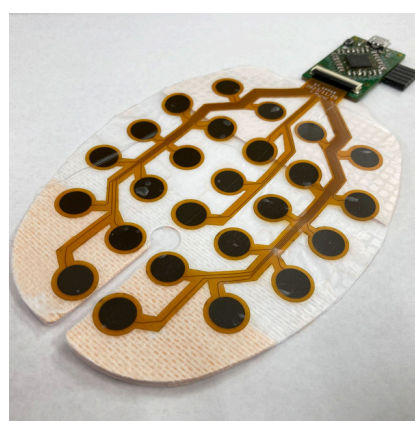


先端医療工学研究所 藤田 孝之・教授

病院などの医療現場では、様々な事故が起こることがあります。センサやIoT（モノとインターネットをつなぐ技術）、エッジAI（データを外部に送らずにAIが判断する技術）を使って、そうした事故を予測・発見できるシステムを作っています。例えば、人にやさしい柔らかいセンサや、ポケットに入れるだけで使えるセンサなど、簡単で安心して使える技術を開発しています。

Point

1. 医療安全
2. センサIoT
3. エッジAI



医療用チューブ抜去の
センサ試作例

病原菌のタンパク質から感染の仕組みを知る

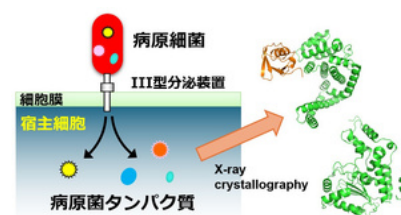


理学部・理学研究科 水島 恒裕・教授

病原菌のタンパク質は、ヒトのからだに感染する際の付着や侵入、免疫回避のために重要な役割を果たしています。これら病原菌タンパク質の形（構造）を知ることで、病原菌がどのようにしてヒトの細胞に侵入し、免疫系を回避して、病気を引き起こしているのか、その仕組みを知ることができます。病原菌のタンパク質は感染の鍵を握っているため、これらの研究成果は新しい治療薬の開発に役立てることができます。

Point

1. 放射光（Spring-8）を使って
タンパク質の形（構造）を知る
2. 病原菌のタンパク質の研究から
感染のメカニズムを解明
3. 新しい抗菌薬開発の基盤をつくる



03

すべての人に健康と福祉を

あらゆる年齢のすべての人々の
健康的な生活を確保し、福祉を促進する

3 すべての人に
健康と福祉を



Wearable Deviceを活用した 健康指標の予測に向けた取り組み



Point

1. AIを活用した予測モデル
2. ウェアラブルデバイス
(Wearable Device)
3. 健康指標

地域ケア開発研究所 本田 順子・教授

Apple WatchやFitbitなど、身体に身に付けることで健康状態（睡眠時間、心拍数、脈拍数等）のデータを得ることができるデバイスがあります。そのデバイスから得た多くのデータを使って、AIに学習させ、人々の日常生活の活動量や認知機能を予測することができるモデルを企業とともに開発しています。また、Wearable Deviceを用いてタクシードライバーの健康状態と危険運転の関係を分析し、事故防止の方策を検討しています。



植物との関わりや緑環境がもたらす 人の健康への効果を活用する



Point

1. 緑環境が人の健康に与える効果
2. 公園・緑地を活用した
well-beingの向上
3. 緑環境や植物、園芸活動を介した
つながりづくり

緑環境景観マネジメント研究科 剣持 卓也・講師

私たちは、植物に触れることで得られるストレス軽減効果や、植物を介したコミュニケーションの促進に着目し、その実践として都市公園において未就学児とその保護者を対象としたイベントを開催しました。緑に囲まれた環境の中で、親子と一緒に植物を集めたり、新たな発見をしたり、作品を創作したりすることで、親子の関係が深まるとともに、植物や創作した作品を介した家族間の交流が促進され、新たなつながりが生まれます。私たちは、このような社会的健康の向上に加え、緑環境や植物が人の健康にもたらす多様な効果が広く活用されることを目指し、調査研究を進めています。



04

質の高い教育をみんなに

すべての人々に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する

4 質の高い教育を
みんなに



モノづくりの楽しさを広める活動と技術伝承



学生団体・「ロボット研究同好会」

(令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体)

本事業では技術伝承と地域貢献を軸に3つの活動を展開しました。「科学の祭典」等では3Dプリンタ実演やロボット展示を通じ、小中高生や保護者へモノづくりの魅力を発信し家庭への導入を促しました。「キャチロボバトルコンテスト」では95チーム中上位16位の成果を収め、技術記録や勉強会により学部生主体の技術承継体制を確立しました。新規の「蟹鼓楼機械時計プロジェクト」では明石ゆかりの時計の構造調査と部品復元を実施しました。今後はモノづくり普及に向けた発信や他団体との連携を通じ、更なる技術力向上と発展に取り組めます。

Point

1. 子どもたちにもものづくりの楽しさを伝える
2. キャチロボバトルコンテスト 決勝進出
3. 蟹鼓楼機械時計プロジェクト



科学の祭典（ロボット展示の様子：左上）と
兵庫出石・蟹鼓楼機械時計プロジェクト
（3Dプリンタによる復元レプリカ：右下）

小型爬虫両生類化石の分類学的研究



自然・環境科学研究所 池田 忠広・教授

兵庫県の丹波市および丹波篠山市に分布する篠山層群大山下層（前期白亜紀：約1億1千万年前）からは、恐竜類をはじめ、カエルやトカゲ類など多様な動物化石が産出しています。私は、これらの化石がどのような生物であったのかを明らかにする研究に取り組んでいます。同時代の化石記録は世界的にも稀少であり、本研究の成果は、各動物群の系統進化、過去の生物多様性、古生物地理に関するさまざまな疑問の解明に資するものです。

Point

1. 小型爬虫両生類化石
2. 系統進化、生物多様性、古生物地理
3. 下部白亜系篠山層群大山下層



発掘の様子（左上写真）
モロハサウルス・カミタキエンシスの化石
（右下写真）

04

質の高い教育をみんなに

すべての人々に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する

4 質の高い教育を
みんなに



小規模校と地域が共創する教育エコシステム



環境人間学部・環境人間学研究科 尾崎 公子・教授

急激な人口減少により学校の小規模化が進む中、持続可能な社会を支える新たな学校モデルの構築を目指して研究を進めています。学校を地域コミュニティの核となる社会インフラと捉え、地域の公益をどのように実現するかを探究しています。フィールドワークを重視し、国内外の調査を通じて、小規模校と地域が共創する教育エコシステムの可能性を明らかにし、次世代の教育保障と地域の持続性に関する知見を提供しています。

Point

1. 小規模校
2. 内発性
3. 教育エコシステム



韓国共同研究者等との韓国フィールド調査

天文学、特に地球外知的生命探査から 地球と人類の未来を考える



自然・環境科学研究所 鳴沢 真也・専任講師

無数の偶然を乗り越えて進化してきた私たちホモ・サピエンスは極めてレアで貴重な存在です。環境破壊、シンギュラリティ、戦争などで滅びてはなりません。はたして人類は生き延びることができるのでしょうか？ ヒントは宇宙における文明数にあります。それは文明の継続年数の平均値に比例するからです。SETI（地球外知的生命探査）による文明数の推察から、逆に私たちの未来を考えます。「人類の行末は宇宙にあり」

Point

1. 天文学
2. 地球外知的生命探査
3. 電波観測、光学観測



05

ジェンダー平等を実現しよう

ジェンダー平等を達成し、
すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う

5 ジェンダー平等を
実現しよう



SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity) の多様性の尊重に関する基本方針



「D&I (ダイバーシティ&インクルージョン) 宣言」を公表し、性別、障がい、国籍、宗教、文化、性的少数者であること等にかかわらず、ひとりひとりの学生・教職員が持つ能力を最大限に活かし、共創できる環境をつくることを目指しています。

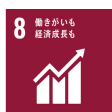
この宣言に基づき、「性的指向 (Sexual Orientation)」と「性自認 (Gender Identity)」に関する悩みや生きづらさを抱える人がいることを常に理解し、差別や偏見のない教育・研究環境を整えるため、その実現の指針となる6つの基本方針を令和5年4月に策定しました。

Point

1. D&I宣言
2. 性的指向と性自認に関する悩みや生きづらさを抱える人への理解
3. 多様性の尊重に関する6つの基本方針策定



ひょうご・こうべ女性活躍推進企業に認定



令和5年3月に、ひょうご・こうべ女性活躍推進企業に兵庫県・神戸市から認定を受けました。ひょうご・こうべ女性活躍推進企業 (ミモザ企業) 認定制度は、令和4年11月に兵庫県と神戸市の共同で創設された誰もが働きやすい職場環境づくりや、女性の登用・定着促進等に取り組む企業を認定する制度として創設され、第1回の認定として、70社の県内企業が認定されました。そして、これまでの取組が評価され、令和8年4月から向こう3年間、認定の更新をいただきました。

Point

1. 兵庫県立大学は、ひょうご・こうべ女性活躍推進企業に認定
2. 誰もが働きやすい環境づくり、女性の登用、定着促進などへの取組
3. 第1回ミモザフォーラムでは、県内70社の企業が認定



ひょうご・こうべ
女性活躍推進認定
ミモザ企業

06

安全な水とトイレを世界中に

すべての人々の水と衛生の利用可能性と
持続可能な管理を確保する

6 安全な水とトイレ
を世界中に



自治体関係者及び市民と一緒に考える 上下水道料金のあり方



Point

1. 安心・安全・持続可能な
上下水道サービスの提供
2. 需要の減少と経営環境の変化
3. 受益と負担のバランス

国際商経学部・社会科学部 瓦田 沙季・教授

私の専門は公会計（政府及び民間非営利組織の会計システムを研究対象とする）です。そのため、自治体の上下水道事業経営審議会等の仕事に携わっています。少子高齢化社会における急速な人口減少に伴うサービス需要の減少と施設の老朽化に伴う更新需要の増大等により、上下水道事業の経営環境が大変厳しくなっています。安心・安全・持続可能な上下水道サービス（受益）と料金（負担）のあり方についてみんなと一緒に検討しています。



下水処理場視察

地球規模の感染症への挑戦： エボラとコレラとエムポックスの研究



Point

1. 感染症
2. エボラウイルス
3. エムポックス
4. コレラ

地域ケア開発研究所 ムゼンバ バシルア アンドレ・教授

世界的に重要な感染症であるエボラウイルス病（エボラ）とコレラ、そして最近注目されているエムポックスの研究に取り組んでいます。エボラに関しては、アフリカ大陸における流行状況を系統的に解明した他、この病気に関して流行地域の人々が有する様々な誤解や噂についての社会科学研究も行いました。コレラについては、インドとの共同研究でアウトブレイクの要因解明や迅速診断キットの有効性評価を行っています。これらの研究を通じ、感染症の拡大防止に寄与することを目指しています。



写真：コンゴ人医師にエムポックスの治療のアドバイスをするムゼンバ教授（左）

07

エネルギーをみんなに そしてクリーンに

すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



電力・エネルギー市場における 価格変動とリスク管理



Point

1. 電力価格の安定
2. 電気事業者に関わるリスク管理
3. 持続可能なインフラ基盤の構築

国際商経学部・社会科学部 落合 夏海・講師

近年、電力や天然ガスなどのエネルギー価格は、国際情勢や天候・災害などの影響によって大きく変動しています。エネルギーや電力の安定調達・安定供給は、持続可能な経済発展を支えるために欠かせない基盤であり、不確実性が増大する中において、こうした価格変動の仕組みを理解し、リスクを適切に管理することが求められています。私は、電力市場やエネルギー市場の価格変動の特徴やリスク要因を分析し、企業や社会が安定してエネルギー市場を利用できるためのリスク管理手法について研究を進めています。



資源供給リスクフリー二次電池の開発

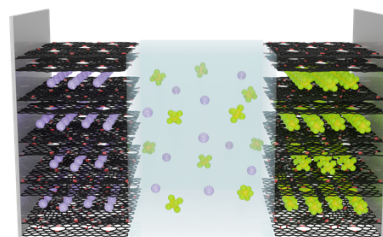


Point

1. 資源供給リスクフリー
2. 蓄電池
3. 低環境負荷

工学部・工学研究科 稲本 純一・准教授

再生可能エネルギーを利用した発電には、電力平準化のため定置用蓄電池を利用する必要があります。その蓄電池として広く利用されているリチウムイオン電池にはリチウム、コバルト、ニッケル、銅などの資源が使用されているため、将来的に原料価格の高騰や供給ストップにより電池が作れなくなるリスクがあります。そこで我々は安価で資源供給リスクのない原料を利用した二次電池を実現するため、その研究開発に取り組んでいます。



資源供給リスクフリー二次電池の模式図

07

エネルギーをみんなに そしてクリーンに

すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



エネルギーの有効利用が可能な 機能性薄膜の開発

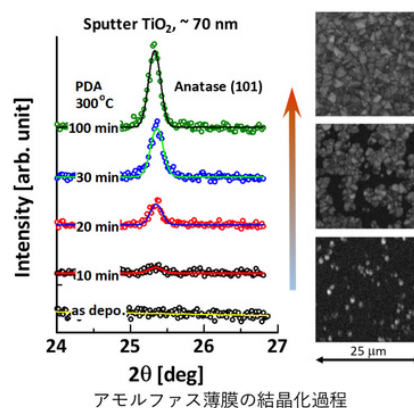


工学部・工学研究科 新船 幸二・准教授

太陽はほぼ「無限のエネルギー源」です。これを有効利用することは環境保護の観点からも大変重要です。そこで太陽光を電気エネルギーに変換する太陽電池や化学プロセスの省エネルギー化に寄与する光触媒など、重要な機能を有する薄膜作製に関する研究を行っています。新しい材料の発見により、これまで以上の省エネルギー化や、希少な元素を用いないデバイスなど持続可能な社会実現に寄与すると期待出来ます。

Point

1. 太陽電池用パッシベーション膜
2. 薄膜状光触媒による有害物質の分解
3. 強誘電体薄膜



持続可能な未来社会を創る 電気エネルギー技術

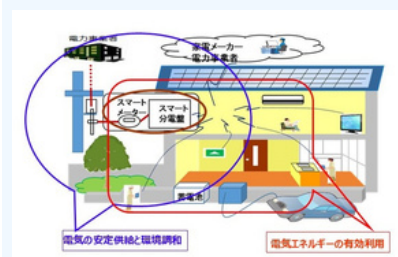


工学部・工学研究科 上野 秀樹・教授

次世代送配電網（スマートグリッド）における効率的なエネルギーマネジメントシステムの構築を目指しています。主な柱は、効率的な消費に向けた「新しい電力測定技術の開発」と、電力設備の安定運用に不可欠な「絶縁劣化診断技術の開発」です。電磁波や超音波を用いて部分放電を検出し、機器の寿命や安全性を評価する独自のノウハウを蓄積しています。社会インフラの安定供給と環境調和を支える要素技術の開発に取り組んでいます。

Point

1. 電気設備・機器の絶縁診断技術
2. 環境にやさしい電気絶縁技術
3. 電気エネルギー消費の見える化



07

エネルギーをみんなに そしてクリーンに

すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



産業技術における高圧力の効果

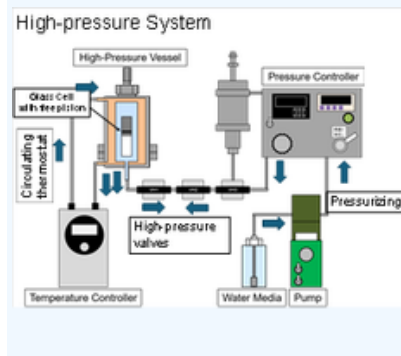


工学部・工学研究科 前田 光治・教授

一般の産業技術における操作変数は温度や濃度ですが、それらの伝達は非常に遅いです。そこで、高圧力を操作変数とした新しい二次電池の開発や分離操作について研究を進めています。圧力は、温度や濃度と比較して伝わりやすく、系全体に均一な素早い変化が実現でき、それにより高速で長寿命の電池や高純度物質の生産に効果があります。

Point

1. High-pressure
2. Low-entropy
3. Crystallization



エキゾチックな特性を示す電子の探求



理学部・理学研究科 水戸 毅・教授

物質の性質を決める電子の状態をミクロな視点から解明する研究に取り組んでいます。私たちが最近注力している研究テーマの一つは、質量が実質的にゼロとなり、省電力デバイスや量子コンピューターへの応用が期待される「ディラック電子」です。これまでに、黒リン（リンの同素体）を高圧環境下に置くとディラック電子が発現することを、超伝導マグネットを用いた核磁気共鳴（NMR）測定により世界で初めて明らかにしました。さらに、近年著しく発展する計算科学を導入し、独自の実験との「両輪」で、電子状態のさらなる解明に挑んでいます。

Point

1. 新機能物質の探究
2. ミクロな探査
3. 計算科学の導入



08

働きがいも経済成長も

包摂的かつ持続可能な経済成長及び
すべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがい
のある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）
を促進する

8 働きがいも
経済成長も



ため池のある暮らしの未来に向けて、 市民とともに研究所を設立



環境人間学部・環境人間学研究科 柴崎 浩平・助教

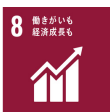
ため池等の地域資源は、集落を基盤とするコミュニティによって管理されてきました。しかし、少子高齢化の影響を受け、持続的に管理していくことが難しくなっています。そこで、行政や大学と連携しながらも、ため池のある暮らしの未来を創造するための実践的な研究を市民とともに展開していきます。現状をより良くしていく活動を展開していきたい、という思いを抱く市民（研究員）を支え、多様な活動が生まれやすいムードをつくっています。

Point

1. 市民を主体とした自律的な運営
2. 大学、行政、企業、市民の連携
3. 自然との共生に向けた学際的・実践的研究



産学連携によるリカレント教育



国際商経学部・社会科学部 秋山 秀一・教授

私たちの専攻は、企業や行政機関、病院等で働く社会人を対象とした経営専門職大学院（MBAコース）として、リカレント（社会人の学び直し）教育に取り組んでいます。外部向けの研修の一つ「プロ人材コーディネーター育成研修」では、兵庫県の経済団体や企業と連携して、大企業の人材と中小企業を結びつけ支援を行うコーディネーターを育成しています。企業や地域社会のイノベーションに経営のプロ人材が求められているのです。

Point

1. リカレント教育
2. プロ人材コーディネーター
3. 企業や地域社会のイノベーション



09

産業と技術革新の基盤をつくろう

強靱（レジリエント）なインフラ構築、
包摂的かつ持続可能な産業化の促進及び
イノベーションの推進を図る

9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



「放射光×顕微鏡」で社会課題解決に挑む

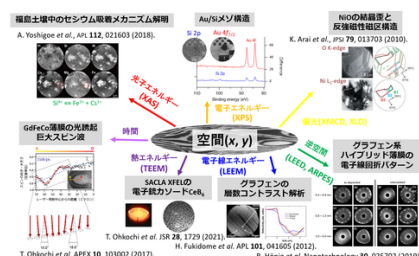


高度産業科学技術研究所 大河内 拓雄・教授

みなさんが普段目にする光学顕微鏡は、モノの形と色を拡大して観察することができますが、光源としてX線を用いると、原子中に存在する電子のツボを上手に突くことで、元素の種類や結合状態、電荷秩序や磁石の性質など様々な情報をナノメートルスケールで可視化できます。ニュースバル放射光施設にあるX線顕微鏡を用いて、電子デバイスから環境科学、産業製品まで、幅広い研究分野における課題に挑んでいます。

Point

1. 「放射光×顕微鏡」の組み合わせで電子状態を実空間で可視化
2. 元素分布、化学状態、磁性、電荷秩序など多彩な解析機能
3. 最先端デバイスから暮らしに身近な材料まで何でも分析



ニュースバル放射光施設でしかできない 最先端科学



高度産業科学技術研究所 橋本 智・教授

ほぼ光速で運動する電子の軌道を磁場で曲げると、X線領域を含む非常に明るい光（放射光）が放出されます。電子を加速するには巨大な加速器が必要であり、私の研究室では国内大学最大の「ニュースバル電子加速器」を運用しています。加速器の安定運用と高度化により、放射光による最先端研究や産業応用を推進するとともに、相対論的電子ビームを用いた新光源開発やレーザーコンプトン散乱ガンマ線の生成、加速器運転へのAI・機械学習の適用など、加速器科学の研究を進めています。

Point

1. 国内大学最大の放射光専用電子加速器
2. 相対論的電子ビームを用いた新光源開発
3. 世界でも数少ないレーザーコンプトン散乱ガンマ線施設BL01



09

産業と技術革新の基盤をつくろう

強靱（レジリエント）なインフラ構築、
包摂的かつ持続可能な産業化の促進及び
イノベーションの推進を図る

9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



組織におけるイノベーションの創造



国際商経学部・社会科学部 中村 友哉・准教授

組織が長期間にわたって成長・存続していくためには、新しいモノやコトを社会に創り出す活動であるイノベーションが欠かせません。世の中を大きく変えることのあるイノベーション活動には、いまだにわかっていないことが数多くあります。私は組織がイノベーション活動を行う際に重要となる要因や、その発生のメカニズムについて調査、研究を行っています。

Point

1. イノベーション
2. 創造
3. 製品開発



計算科学による材料の特性解析と 新たなデバイスの理論的設計

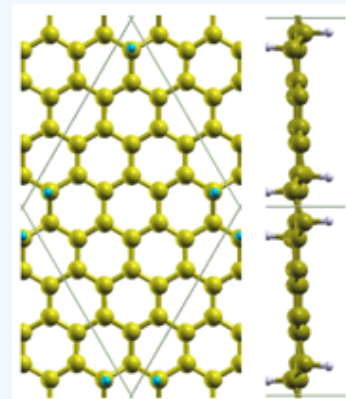


理学部・理学研究科 草部 浩一・教授

現代では、原子スケールの物理現象を、実験結果に極めて近いデータを与える精度で、計算機の中に再現できます。この計算物質科学を、基礎理論から応用まで研究しています。そこで、技術革新を与える新しい物質や電子デバイスを設計・提案することができ、産業基盤の形成に貢献できます。狙った量子効果を実現する安定物質を提案でき、例えばフェルミ速度可変ナノグラフェンの合成法も提案しています。グラフェン上の吸着水素を適切に配置すると、新しい電子デバイスとして役立てられるのです。最近では、ロケット推進薬の主成分である過塩素酸アンモニウムの分解初期過程を活性化するための研究を行って、宇宙開発の専門家と共同研究を進めています。

Point

1. 計算科学による機能の設計
2. 機能の設計図を実現する
ナノグラフェン
3. ロケット推進薬の分解
シミュレーション



フェルミ速度が減少したディラック電子
が現れる水素化グラフェンの物質設計



小胞体ストレス応答とゴルジ体ストレス応答 を軸とした新規創薬戦略の基盤構築



理学部・理学研究科 吉田 秀郎・教授

ゴルジ体ストレス応答の専門家である私と小胞体ストレス応答の権威である河野特任教授、学士院賞を受賞した藤木特任教授がチームを組んで、がんや糖尿病等の疾患に対する新規創薬戦略の研究を行っています。吉久教授、水島教授、今高教授（本学工学部）、岡村教授（奈良先端大学）との共同研究では武田科学振興財団から、また清水教授（東京医科歯科大学）と後藤教授（立教大学）、高橋教授（名古屋大学）との共同研究ではAMED-CRESTから大型研究費を得て、最先端の研究を進めています。

Point

- 1.世界的に著名な研究者を結集した研究体制
- 2.潤沢な研究費と最先端の研究設備
- 3.独創的な研究と先端医療への貢献



新規創薬のための試験管内 タンパク質合成技術の開発と応用

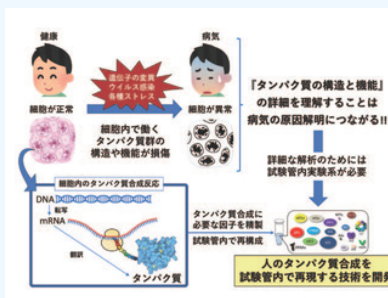


工学部・工学研究科 町田 幸大・准教授

細胞内で合成されるタンパク質に何らかの異常が生じると人は病気になります。従って、タンパク質の構造や機能を詳しく調べることは病気の原因を解明することにつながります。私たちは、人のタンパク質合成を試験管内で迅速に再現できるシステムを樹立しました。これにより、これまで解析が難しかった疾患関連タンパク質の解析もできるようになりました。さらに研究を進め、新規創薬のための技術開発の促進に貢献したいと考えています。

Point

- 1.新規創薬に資する試験管内タンパク質合成技術の開発



09

産業と技術革新の基盤をつくろう

強靱（レジリエント）なインフラ構築、
包摂的かつ持続可能な産業化の促進及び
イノベーションの推進を図る

9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



大規模言語モデルの内部動作の理解

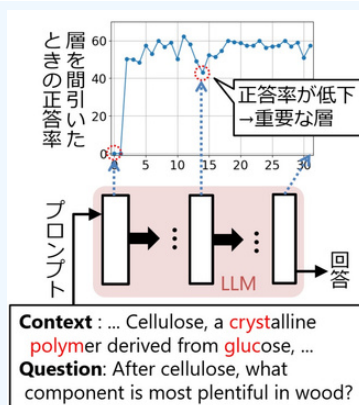


社会情報科学部・情報科学研究科 湯本 高行・准教授

近年、ChatGPTなどの大規模言語モデル(LLM)が急速に発展し、さまざまな場面で活用されています。その一方で、回答生成時の計算の流れを追うことはできませんが、それぞれの計算の意味は十分には明らかになっておらず、回答の信頼性向上に向けた課題となっています。本研究では、LLMの内部動作の理解を目的とし、モデルの構成要素の役割や回答生成時における指示文(プロンプト)の参照箇所の分析などに取り組んでいます。さらに、誤情報の検知や効果的なプロンプトの設計への応用も目指しています。

Point

1. 大規模言語モデルの信頼性向上
2. AIの解釈可能性
3. プロンプト解析



金属含有タンパク質が持つ高機能の仕組みを理解する

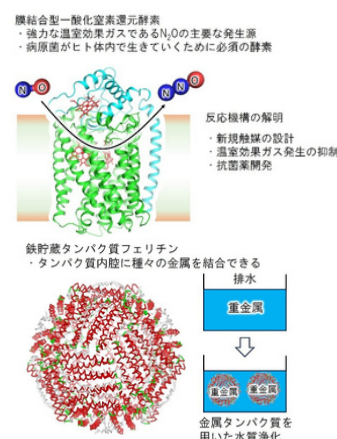


理学部・理科学研究科 當舎 武彦・教授

生体内において、様々な生理反応に関わっている金属タンパク質の構造機能相関の解明を目指した研究にとりくんでいます。金属タンパク質は優秀な触媒であり、その反応機構の解明は、新規触媒設計の指針となります。また、当研究室で研究対象としている金属タンパク質は、温室効果ガスの発生と関りが深いものや、排水に含まれる重金属の回収に利用できるものがあり、その反応機構の解明は、環境問題の解決に貢献できる可能性があります。

Point

1. 金属タンパク質
2. 温室効果ガス
3. 排水からの重金属の除去



10

人や国の不平等をなくそう 各国内及び各国間の不平等を是正する

10 人や国の不平等をなくそう



国籍、宗教、文化を超えて みんなが過ごしやすい大学/社会を作ろう！



Point

1. 食を通じた国際理解と共生
2. 須磨海岸清掃とアップサイクルアート
3. SDGsWeekイベント売上金をUNICEFに寄付

優秀賞受賞団体・「S&I Club」

(令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体)

国際商経学部を中心に構成されるS&I Clubは、「誰もが過ごしやすい大学・社会」を目指し、2025年度も多角的な活動を展開しました。本年度はユニセフ兵庫との連携強化を軸に、ガザ地区人道支援の募金活動に注力しました。三宮OPAでのフリーマーケットやヴィーガン・クッキングを通じ計17,767円を寄付したほか、須磨海岸の海ごみをアートに再生する「シーサイクルフェス」を開催し、子供から大人までSDGsを「自分ごと」として捉える機会を創出しました。活動を通じリーダーシップや外部団体との折衝など多くの学びを得ました。今後は学内食堂改革やデジタル技術を活用した国際交流など、よりインタラクティブな活動へ発展させる方針です。



ヴィーガン料理試食会
「VEGAN DAY COOKING EVENT」

企業の国際事業活動



Point

1. J-POP
2. グラスルーツ・グローバルゼーション
3. 海外フィールドワーク

国際商経学部・社会科学部 山口 隆英・教授

2025年度のゼミから、日本の音楽がどんな形で世界に広がっているか、“Japanese Music Go Abroad”を研究しています。この研究は、現地の文化と、日本の文化がどうしたら共存できるのかという隠れたテーマです。言語、文化、価値観など、様々な違いがある人たちが、違いと認め、お互いに尊重しあえる社会を実現する上での手がかりが提供できればと思っています。日本の音楽の国際化というテーマに向けて、参加学生は、海外でのフィールドワーク等を頑張ってくれています。



10

人や国の不平等をなくそう 各国内及び各国間の不平等を是正する

10 人や国の不平等をなくそう



誰もが「生き心地のよい社会」へ



環境人間学部・環境人間学研究科 竹端 寛・教授

福祉課題は「個人の不幸」や「自己責任」と捉えられがちですが、貧困や障害、ひきこもり、認知症、ハラスメントなどは誰もが関わる可能性があります。また、社会構造の歪みが、様々な福祉課題の悪循環を加速させている可能性もあります。私はケアの現場において、反抑圧的实践やCaring democracyの立ち位置から、悪循環を好循環に変える方策について、支援者の皆さんと対話的に考え合う仕事をしています。

Point

1. 反抑圧的实践
2. 相互主体とエンパワーメント
3. 対話的实践



竹端教授の著書（書影）

公園緑地におけるユニバーサルデザイン



緑環境景観マネジメント研究科 美濃 伸之・教授

公園緑地を対象に障がい者や高齢者などの利用を支えるユニバーサルデザインのあり方について研究しています。地形や環境的な制限の多い公園緑地では施設整備などのハード整備に一定の限界があり、ユニバーサルデザインの実現にはソフト支援の併用が欠かせません。ここでは、情報提供や人的支援のあり方はもとより、公園緑地の整備や管理運営などの実務を担っている方々への教育プログラムについても検討を重ねています。

Point

1. 障がい者などの公園利用を支えるユニバーサルデザインの実現
2. ハード整備とソフト支援の併用が不可欠
3. 情報提供、人的支援、実務者教育のあり方について重点的に研究



11

住み続けられるまちづくりを

包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で
持続可能な都市及び人間居住を実現する

11 住み続けられる
まちづくりを



光都地域交流活性化事業



優秀賞受賞学生団体・「スパークル」

（令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体）

播磨科学公園都市において地域住民と学生が交流し、コミュニティの活性化や地域の魅力発信を目指しました。今年度は「つなぐ」をテーマに活動を発展させました。被爆80年の節目の年に「被爆ヴァイオリン」演奏会で音色を鑑賞し平和の尊さを共有し、「光都の多様性を楽しむ」会では外国人住民や専門家と街の魅力や課題を再発見しました。また不要となった教科書や書籍を必要とする人に繋ぐ「能登半島災害支援古本市」では115,770円を日赤へ寄付し、学生の支援の輪を広げました。さらに劇団公演、ボッチャ大会、レゴワークショップなど多彩な活動を展開し、世代や国籍を超えたつながりの重要性を実感する一年となりました。

Point

1. 「つなぐ」をテーマに
光都地域多世代交流
2. 被爆ヴァイオリンの音色を鑑賞し
平和の尊さを考える
3. 古本市を通じた能登半島支援



「スパークル」×「劇団ぼちゃん」
『レテの肖像』公演

子どもたちの「居場所」づくりのための 課題を実践的に探究する



学生団体・「Conneko -コネコ-」

（令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体）

地域の子どもの食堂4拠点（きっずきっちゃん曾根、ごはん処おかえり、阿弥陀おかげ村子ども食堂、地域・子ども食堂よねだ）での活動を通じ、子どもの居場所の在り方を実践的に探究しました。食事・学習支援や外遊びのサポート等を担い、継続参加で子どもと関係を深め、運営側からも学生の参加が評価されました。誰もが来られる場であることでレッテル貼りを防ぐセーフティネットの役割や、高齢者中心の運営に学生が加わる意義を学びました。一方で支援が必要な子の把握や情報共有の課題もみられ、今後は記録共有やミーティングを強化し、地域団体と協働してより良い居場所づくりの具体策を検討していきます。

Point

1. 子どもの「居場所」づくり
2. 多世代共生コミュニティ
3. 地域セーフティネット



地域・子ども食堂よねだ：多世代で楽しむ
卓球バレーの様子

11

住み続けられるまちづくりを

包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で
持続可能な都市及び人間居住を実現する

11 住み続けられる
まちづくりを



災害が起こる前までに、 人々の防災力をいかに上げるか



環境人間学部・環境人間学研究科 木村 玲欧・教授

21世紀前半、日本は「大災害時代」になると考えられています。自然災害は「めったに起きない」ものではなく「頻繁に発生して、その度に命を脅かすもの」になるのです。災害が起こる前までに、人々の防災力をいかに上げるか、学生とともに実践・研究をしています。写真は、小学生の「まちあるき水害防災教育」です。被災者の話と当時の写真から災害の危険性を学びます。保育園児、小中高校生、市民、企業への防災教育プログラム・教材開発で、災害への「わがこと意識」と「生きる力」を育みます。

Point

1. 防災心理学
2. 防災教育学
3. インストラクショナル・デザインによる教育プログラム開発



小学生への防災教育実践

地域資源の活用と保全を通じた 持続可能な社会づくり



地域資源マネジメント研究科

中井 淳史・教授、山室 敦嗣・教授、
矢ヶ崎 太洋・准教授

人間社会は地域の様々な資源を見出し、保全し、活用することで産業や文化を発展させてきました。本研究科では、主に但馬地域をフィールドとして、大地・自然・人間の関係性を過去・現在・未来の視点と、人文社会科学（歴史学・社会学・地理学）の立場から研究しています。大学院のキャンパスが対象地域に近いので、徹底したフィールドワークから地域社会を理解し、得られた成果を地域づくりに活用しています。

Point

1. 地域社会の科学的解明
2. ジオパークやコウノトリの野生復帰に現場での実践的研究
3. 持続可能な地域社会づくり



11

住み続けられるまちづくりを

包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で
持続可能な都市及び人間居住を実現する

11 住み続けられる
まちづくりを



災害や感染症等の危機を乗り越える 戦略と手法の探求



減災復興政策研究科 紅谷 昇平・准教授

複雑化した現代社会では、大きな自然災害や感染症流行等が発生すると、その影響は社会の隅々まで広がっていきます。それを防ぐには、国・都道府県・市町村、企業、コミュニティ、福祉施設等、様々な関係者が危機対応能力を強化し、連携していくことが求められます。阪神・淡路大震災以降の様々な災害・危機の教訓を学び、自治体や企業、福祉施設等と協力した計画づくりや訓練・研修等の実践的研究を通じて、未来の危機に対処するための戦略と手法を探求しています。

Point

1. 複雑化した現代社会では災害や感染症の危機が波及
2. 過去の災害・危機の教訓から社会の対応体制を実践的に研究
3. 自治体・企業・福祉施設等と訓練や防災計画づくりで連携



遠隔手法による庭園設計及び 工事監理の効率化



緑環境景観マネジメント研究科 沈 悦・教授

庭づくりに取り扱っている資材は樹木や自然石等、設計図の通りになる自然素材が少なく、作庭において設計者が数多くの資材売り場や工事現場を巡り指示をしないとはいけません。この従来型の作庭は高額な経費がかかる一方、現場での打ち合わせや資材の運搬、交通等にかかるエネルギーと時間も多いです。本研究は動画通信の手法で設計者が現場に行かなくても、庭の設計と工事監理ができることを検証する研究です。

Point

1. オンラインによる設計
2. ドローンやiPadの活用
3. 動画通信による工事監理



11

住み続けられるまちづくりを

包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で
持続可能な都市及び人間居住を実現する

11 住み続けられる
まちづくりを



高校、地域と連携した 地域防災力向上に貢献する活動



減災復興政策研究科 浦川 豪・教授

2016年度から看護医療・健康類型2年生を中心に、学校設定科目「看護医療基礎」の中で、地域に根差した防災・減災に関わる様々な社会貢献活動を展開している兵庫県立尼崎小田高等学校と連携した地域防災力向上のための取り組みを実施しています。年に1度、地域団体、自治体、大学、高校と連携して、防災・減災イベント（あまおだ減災フェス・令和4年で5回開催）を開催し、副専攻（防災リーダー教育プログラム）の学部生を大学院生がサポートする形でイベントを企画、運営しています。様々な団体が出展内容を持ち寄り、フリーライブやファッションショー等が公開され、毎年数百人の参加者が集うイベントとなりました。

Point

1. 高校、地域との継続的な連携
2. 地域防災力向上への貢献
3. 年に1回の防災・減災イベント（あまおだ減災フェス）の開催



自動車を活用した超高密度地震観測システム

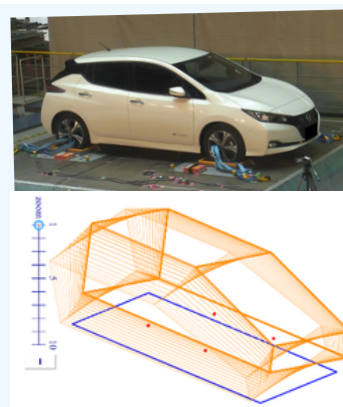


減災復興政策研究科 平井 敬・准教授

世界有数の地震多発国、日本。日頃の備えに加え、地震発生後の迅速な被災状況把握と応急対応が何よりも重要です。現在の地震観測網は市町村に1か所から数か所程度です。それに対して、自動車は今や国内で約6000万台。これを地震計として活用できれば、町の中で局所的に強く揺れた場所や道路の被災状況がすぐにわかり、迅速な応急対応が可能になるため、自動車を活用した超高密度の地震観測を可能とする技術開発を推進中です。

Point

1. 地震計として自動車を活用するための振動実験や実証実験
2. コネクテッドカーを利用した超高密度の地震観測技術の開発
3. 自動車の製造・販売・技術移転を通して国際貢献も可能





地域とつくる食の循環「VEGEKOBE」

～西区産規格外野菜の活用による地産地消推進プロジェクト～



Point

1. 規格外野菜の活用とフードロス削減
2. LINEシステム「ベジコベ」による地産地消
3. 多世代連携による持続可能な農業支援

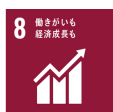
最優秀賞受賞 学生団体・「りふぁーむ」

(令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体)

地元の規格外野菜を活用しフードロス削減と地産地消を推進する取り組みです。高校生との鮮度比較実験やマルシェでのカレー販売、子ども食堂での食育等を実施しました。また、農家からの相談を受け、赤玉ねぎの緊急配布イベントを開催。ニーズ調査から、地産地消の阻害要因が消費者の意識ではなく「購入場所へのアクセスの悪さ」にあると特定。これを解決すべくLINE受発注システム「ベジコベ」を開発し、地域回覧板等で多世代へ広報しました。さらに三宮の飲食店や姫路の社員食堂への導入など販路拡大も実現し、地域全体で農業を支える持続可能なモデルを構築しました。



みんなでツナグ！ニッポンの食の未来



Point

1. 獣害問題の実態調査
2. ジビエ試食体験を交えた小学生向け教育
3. 命の有効活用

学生団体・「MEAT LOVERS」

(令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体)

深刻化するシカの獣害問題と、捕獲された命の有効活用をテーマに活動しました。猟友会や被害者へのインタビューを通じ、個体数増加の背景には里山管理の不足など複合的な課題があることを把握しました。この知見をもとに、なぎさ地域福祉センターで小学生対象の体験型授業と鹿肉の試食を実施し、アンケートでは児童15名中12名が「おいしい」と答え、ジビエへの肯定的な関心を高めました。活動を通じ、現場の声を踏まえた情報理解や、食体験を伴う普及啓発の有効性を学びました。今後は教材を改善し、資源循環やカーボンニュートラルに向けた発信を継続します。



13

気候変動に具体的な対策を

気候変動及びその影響を
軽減するための緊急対策を講じる

13 気候変動に
具体的な対策を



次世代モビリティの電動化システムにおける 電気絶縁技術の高度化

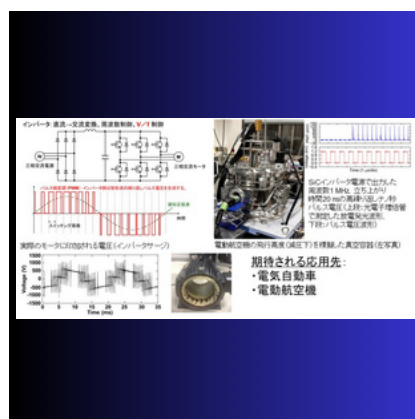


工学部・工学研究科 菊池 祐介・教授

電気自動車や将来の電動航空機化において、次世代パワー半導体デバイスを用いたインバータ駆動モータの高性能化が重要となります。特にインバータ高電圧化と高周波化は機器の小型化に重要ですが、航空機が飛行する気圧の低い環境ではモータ巻線において放電が発生しやすくなります。このような過酷な環境において放電の発生を抑制したり、放電が発生しても十分な寿命を有するナノコンポジット材料の開発に向けた研究を行っています。

Point

1. インバータの高電圧化・高周波化
2. モータコイル内の放電の抑制
3. 放電に耐性を有するモータ巻線材料の開発



雲と気候を物理で描く： 100年先を支える普遍的原理の探求



社会情報科学部・情報科学研究科 柳瀬 友朗・助教

気候科学の根幹を支える放射対流平衡の理論から半世紀。現代の気候予測において、精度の限界を決める最大の不確実性は依然として雲にあります。本研究では、最先端の数値気象モデルによる大規模シミュレーションと、本質を抽出した理論的研究の両面から、雲の自己組織化の物理メカニズム、また気候におけるその役割を探究しています。100年先まで有効な普遍的原理を解明し、将来の気候予測を支える確かな科学的基盤を構築します。

Point

1. 雲の物理的理解による気候予測の信頼性向上への寄与
2. 最先端数値モデルと理論研究による普遍的原理の探求
3. 100年先を支える、気候科学の強靱な基礎基盤の構築



13

気候変動に具体的な対策を

気候変動及びその影響を
軽減するための緊急対策を講じる

13 気候変動に
具体的な対策を



超水滴法に基づく 高精度気象モデルの研究開発

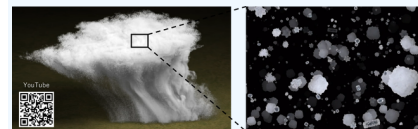


社会情報科学部・情報科学研究科 島 伸一郎・教授

雲を正確にシミュレーションすることは難しく、気象モデルの予測に誤差をもたらす大きな要因となっています。そこで私たちは超水滴法（Super-Droplet Method）という新しい手法を開発しました。これにより、雲のふるまいを従来法よりも高い精度で再現する道が開けました。このモデルは、例えば集中豪雨のメカニズムの解明に役立ちます。また、この技術を火山噴煙やエンジン、惑星形成のシミュレーション等にも応用しようと考えています。

Point

1. 雲は微小な水滴や氷粒の集まり
2. これらの粒子をコンピュータの中でも粒子として表現
3. 次代のスパコンを見据えた先進的なモデル開発



気候変動による 地域気象の変化を把握し、 備える



環境人間学部・環境人間学研究科 奥 勇一郎・准教授

地球温暖化により変わりつつある地域の気象・気候。これまでなかった現象が今や当たり前のようになっています。持続可能な社会の実現には気候変動に適応することが求められています。人口流入が続き、都市化が進む明石市では、近い将来、ヒートアイランド現象がより深刻化することが懸念されています。そこで地域の現状を把握するために、市立小学校9校の百葉箱を活用して2年間の気温観測を実施しました。真夏日の日数といった気温の統計データの分布から、地域ごとの暑さの特性を確認しています。気候変動が地域の暮らしに与える影響を、人々の目線から調査しています。

Point

1. 気候ハザード
2. ヒートアイランド現象
3. 地球温暖化



14

海の豊かさを守ろう

持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

14 海の豊かさを守ろう



未利用資源を用いた微細藻類の培養と二枚貝養殖への適用



工学部・工学研究科 伊藤 和宏・教授

海水温の上昇など海洋環境の変化は水産業へ多大な影響を及ぼしています。一方で、カーボンニュートラルな資源としてバイオマス発電が積極導入され、純木の焼却灰が大量に排出されるようになりました。私たちは、この純木灰を酸で中和することで、二枚貝の餌となる微細藻類を効率的に培養できることを発見しました。現在、藻類培養のスケールアップやマガキ養殖への適用を進めています。

Point

1. 木質バイオマス火力からの燃焼灰が微細藻類の栄養になることを発見
2. 純木灰を酸処理した高性能培地を開発
3. 培養した藻類が二枚貝の餌となることも発見し、養殖への適用を目指す



ユネスコ世界ジオパーク「山陰海岸ジオパーク」の運営とジオパークのネットワーク活動



地域資源マネジメント研究科

教員がユネスコ世界ジオパーク「山陰海岸ジオパーク」の学識専門員や各委員会の委員となり、山陰海岸ジオパークの運営や地球遺産の保全活動、教育活動やジオツーリズム等を通じた地球科学の普及・啓発活動に取り組んでいます。また、本学の公開講座を山陰海岸ジオパークを中心とした各地で実施し、住民やジオガイド等を対象に地域の地球科学的特性の理解や科学リテラシー向上に努めています。教員はジオパークネットワークにおける学術活動やジオパークの審査員等を通じて、各ジオパークが有する知識と経験の共有を推進しています。

Point

1. 山陰海岸ジオパークの運営に主体的に関与
2. 地域の科学リテラシー向上のための各種活動を実施
3. 国内・国外のジオパークネットワークを活かした知識と経験の共有



15

陸の豊かさも守ろう

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

15 陸の豊かさも守ろう



但馬地域の湿地・草地保全活動によるSDGs推進活動



学生団体・「豊岡コウノトリ湿地保全部隊」

（令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体）

本事業は学生・地域・行政が協働し、但馬の自然環境保全により持続可能な社会を目指すものです。2025年度は豊岡市やIVUSA等と連携し活動を拡大しました。具体的には外来種オオキンケイギクの駆除や、ラムサール条約湿地でのビオトープ整備と生き物調査を実施しました。特に管理中のビオトープで絶滅危惧種コウノトリの飛来・営巣を確認し、生態観察から次年度の巣塔造成計画へと繋げました。さらに豊岡市長との意見交換で行政との協力体制を強化しました。今後は観察結果を反映した環境整備や巣塔造成を進めると共に、行政職に就いた元代表とも連携し、専門知識を活かして継続的な活動の向上を図ります。

Point

1. 特定外来生物オオキンケイギク駆除
2. ラムサール条約登録湿地でのビオトープ整備と生き物調査
3. コウノトリの生態観察



ビオトープ保全活動
（株式会社メルコパワーデバイスとの連携）

みんなで守る兵庫の自然 ～外来種から考える生物多様性～



学生団体・「ひとく調査隊」

（令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体）

兵庫県内の生物多様性保全を目的に約2年間実施し、今年度では外来生物の発見と普及啓発活動に注力しました。今年度新たに導入したSNSでの情報収集においては、Instagramのフォロワーが1,200人を突破。市民の目撃情報を基に、兵庫県立有馬富士公園でのキベリハムシ初記録や特定外来生物クビアカツヤカミキリの早期通報3件などの成果を得ました。また、兵庫県立人と自然の博物館とのワークショップ（約400人参加）や夢前中学校での校内調査等、教育・啓発活動も推進しました。本事業は今年度で終了となりますが、SNSを活用した市民参加型調査の有効性や情報発信の重要性を再確認する機会となりました。

Point

1. SNS活用・市民参加型調査
2. 外来種情報の共有と拡散
3. 博物館との連携ワークショップによる啓発



15

陸の豊かさを守ろう

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

15 陸の豊かさを守ろう



播磨理学キャンパスを取り巻く地域の生物の生物多様性の調査・保全



学生団体・「自然研究会」

（令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体）

生物多様性が高いことで知られる播磨理学キャンパス周辺の光都地域において、今年度は昨年度の腐葉土づくりによる甲虫類保全の成果検証も兼ね、週1回の野鳥観察、月1～2回の植生調査、角亀川での生態調査を継続しました。その結果、夏のキビタキや冬のシロハラなど季節ごとの動植物の変化を詳細に記録でき、昨年度を上回る多様な生物を確認しました。また、図書館での掲示や野草茶会、フロンティア祭での冊子配布やハーバリウム作成体験などを通して、地域との交流も深めました。これらの活動により、調査技術だけでなく成果を分かりやすく伝える力も身に付きました。今後は年次データを比較して環境変化の分析を進めるとともに、外部への発信機会をさらに広げていく予定です。

Point

1. 光都地域周辺の生態系調査
2. 地域住民との交流
3. 体験型イベント（ハーバリウム作成体験・野草茶会等）を通じた自然資源の魅力発信



角亀川での生態調査

植物標本のデジタル化・アーカイブ公開と標本データ自動抽出システムの開発



自然環境科学研究所 高野 温子・教授

植物や昆虫等の自然史標本は、その日その場所にその生物が存在したという実在の証拠です。それゆえ標本を迅速にデジタル化しその流動性を高めることは、生物多様性の研究促進のために重要です。これまでに、特別な技術のない人でも標本を一定程度の画質で撮影できる装置と、メタデータとなる採集日・採集者・採集地等のラベルデータを各種AI技術を用いて自動抽出する方法を開発しました。

Point

1. 植物への高まる関心
2. 植物標本画像の自動種判定システムを開発
3. 標本データ自動抽出システムを開発



リスト（HP中に掲載）にある2,171分類群の標本であれば、約98%の精度で同定

15

陸の豊かさも守ろう

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

15 陸の豊かさも守ろう



進化の瞬間をとらえる。 タンガニカ湖の生態系研究



自然・環境科学研究所 高橋 鉄美・教授

タンガニカ湖固有のシクリッド、テルマトクロミス・テンポラリスの「普通型」と「矮小型」を用い、種分化と進化のメカニズムを研究しています。体サイズや生息環境の違いが種の誕生にどう関わるか、現地調査、水槽実験での生殖隔離の検証、遺伝子解析により解明を目指します。これは現在進行中の進化を捉え、生物多様性の形成や環境影響を知る上で重要です。今後は普遍的な進化の法則解明を目指します。

Point

1. タンガニカ湖産シクリッド魚類
2. 適応放散
3. 生態的種分化



野生復帰が目指すところ



地域資源マネジメント研究科 出口 智広・准教授

1990年代以降、保全を目的とする野外への生物の移送は急速に増えており、世界では600以上の動物種で試みられています。これに伴い、当初は個別の種の回復を目指していた目標が、2010年代から、生態系機能の回復や、自然とヒトの関わりの再構築を目指す汎用性の高いものにシフトしています。コウノトリなど、東アジアで進む鳥類の取組がどこを目指すべきなのかについて、多くの研究者と連携しながら研究を行っています。

Point

1. 野生復帰の捉え方
2. 自然とヒトの関わりの再構築
3. 東アジアの鳥類研究者の連携



15

陸の豊かさを守ろう

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

15 陸の豊かさを守ろう



陸上節足動物の多様性生物学



Point

1. 系統分類学
2. 種多様性
3. 新種記載

自然・環境科学研究所 山崎 健史・准教授

クモ類を中心に、陸上節足動物の系統分類学的研究を行っています。日本から東南アジアにかけて、学名のついていない生物種（未記載種）が多く、新種記載をとおして、その種多様性を明らかにすることが目標です。これらの研究は、東南アジアの共同研究者と共同で行い、研究成果が現地に還元され、現地の教育や研究者育成に資するような枠組みの中で取り組んでいます。



田園生態系の生物を保全する



Point

1. 二次的自然
2. 人間活動との関わり
3. 生産活動との両立

地域資源マネジメント研究科 内藤 和明・教授

水田や里地・里山など人の生活によって維持されてきた場所では、生活様式の変化に伴って生物多様性が急速に失われています。そのような場所の絶滅危惧生物や生物群集の保全について生態学を基盤に研究しています。例えば、天然記念物に指定されている草本植物の保全を地域住民組織が主導する植生管理によって行うことを目的にした個体群統計学的な調査や、木材生産機能や防災機能に加えて群落の多様性保全機能を評価して自治体スケールでの森林計画のゾーニングに反映させるための条件検討などに取り組んでいます。



16

平和と公正をすべての人に

持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

16 平和と公正を
すべての人に



被災地での犯罪予防

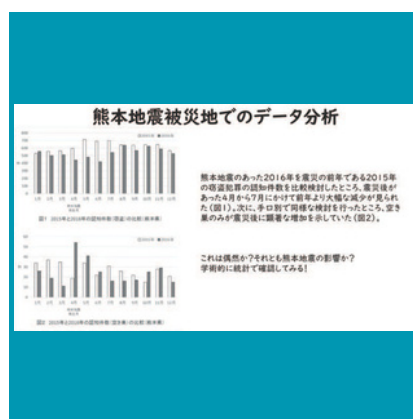


減災復興政策研究科 松川 杏寧・准教授

災害後の被災地では、生きていくために必要なものが手に入らず物を盗む困窮型の犯罪や、被災した人や被災者のための支援を狙った詐欺や悪徳業者による犯罪や性犯罪等の便乗型の犯罪等、様々な犯罪が発生する可能性があります。被災した人たちがさらに被害にあわないように、被災地を支援する心が悪用されないように、被災地で起こりうる犯罪をなるべく少なくする方法を研究しています。

Point

1. 環境犯罪学
2. 犯罪予防
3. 社会的脆弱性



生命中心の視点に基づく アメリカ文学・文化、環境文学研究



環境人間学部・環境人間学研究科 高橋 綾子・教授

21世紀を生きる私たちは、人間活動の結果生み出された地球規模の気候変動と環境汚染に直面しています。本研究室では、アメリカ文学・文化、環境文学を研究の中心においています。アメリカの歴史、文化、文学の理解を通して、様々なテキスト（文学、絵本、映画）における環境と人間の関係を探求しています。環境問題と文学とをつなぐ試みである「エコクリティシズム」という文学手法を学び、生命中心の視点に基づいて、人間が自然をどう捉え、どう向き合ってきたかを研究しています。

Point

1. 生命中心主義（エコセントリズム）
2. アメリカ文学・文化
3. 環境文学



17

パートナーシップで目標を達成しよう

持続可能な開発のための実施手段を強化し、
グローバル・パートナーシップを活性化する

17 パートナーシップで
目標を達成しよう



POST×HIA

多文化共生コラボレーションプロジェクト



学生団体・「SDGs POST (Promotion Office Student Team)」
(令和7年度学生活動支援制度「県大生チャレンジサポート」交付団体)
本事業では、SDGsの普及と多文化共生の推進を軸に5つの活動を展開しました。地域交流の場「国際交流フェスティバル」では、認証マークを用いたビンゴなどを実施。想定以上の親子連れが来場し、遊びを通じて環境・社会問題への関心を高めました。学内では「フードドライブ」でNPO法人へ物資を寄付したほか、コンタクト空ケースの回収、性の多様性理解を促すトイレ掲示など、身近な環境から意識変容を働きかけました。活動を通じ、柔軟な現場対応力と楽しみながら学ぶ「場の構築と共有」の重要性を実感しました。今後は効果測定や回収システムの改善を重ね、持続可能な社会貢献を追求します。

Point

1. ワークショップの開催
2. 大学とNPOの連携：NPO法人フードバンクはりまを通じた貢献
3. 資源循環活動と性への多様性理解を促すトイレ掲示の刷新



ステンシルアートの様子

「WHO協力センター」として災害に強いコミュニティ、安全・安心な社会の構築に向けた国際協力



地域ケア開発研究所 増野 園恵・教授ほか

WHO協力センターとは、WHO（世界保健機関）の事業を専門的・技術的にサポートする活動を実施する機関として、WHO地域事務局長が研究所や大学等の教育機関を指定するものです。地域ケア開発研究所は、災害健康危機管理WHO協力センターとして認証されており、WHOによる災害健康危機管理枠組みの実行や災害健康危機管理分野の研究活動の強化を支援しています。また、得られた知見を基に看護師等の専門職の研修、地域住民や小中学生等を対象にした減災教育等も行っています。

Point

1. 人々が健康に、安心・安全に生活できる社会を目指す
2. 災害危機管理における看護のリーダーシップを強化
3. 看護が積み上げてきた健康危機に関する経験やスキルを職種を超えて共有する



17

パートナーシップで目標を達成しよう

持続可能な開発のための実施手段を強化し、
グローバル・パートナーシップを活性化する

17 パートナーシップで
目標を達成しよう



イノベーションサロン



先端医療工学研究所 藤田 光男・特任教授

イノベーションサロンでは、医療関係者、主に、看護師が日頃から困っていることやこういうものがあったら良いと感じていることを、リラックスした雰囲気の中で、企業や大学の教員とともに議論し、議論の中からイノベーションの芽を発掘し、その芽を大きく育てていこうとしています。例えば、企業の素材や開発品について、看護師の意見を聞いて、臨床現場のニーズに合致した素材・新製品の開発を目指しています。

Point

1. リラックスした雰囲気の中での議論
2. イノベーションの芽
3. 臨床現場のニーズ

イノベーションサロン 目標



明舞まちなかラボ



国際商経学部・社会科学部 和田 真理子・准教授

神戸市と明石市にまたがる明舞団地は開発から60年が経過し、人口減少と高齢化が進むニュータウンです。2009年に商店街の空店舗を活用して誕生した「明舞まちなかラボ」では、高齢化を先取りしている明舞で、ゼミで課題解決を考え、学生が企画を実践するなど、様々な教育研究活動を行ってきました。最近では、県、神戸市、地域の様々な団体と協働して、地域のお祭りの再生や、高齢者の生活を支える自治会やNPOの活性化などを行っています。こうした活動は、地域のつながりを再生し、その延長線上にある地域経済の活性化を企図するものです。学生はまちづくりに欠かせない触媒として、様々な人や組織をつなぐ重要な役割を果たしています。

Point

1. 高齢化ニュータウン
2. 地域のパートナーと協働
3. つながりから地域経済活性化



University of Hyogo S D G s Report 2025

兵庫県公立大学法人 兵庫県立大学

S D G s推進室 発行

〒651-2197 兵庫県神戸市西区学園西町8丁目2-1

<https://www.u-hyogo.ac.jp/sdgs/>

※本レポートは2025年度に実施した取組を記載しております。







We support the Sustainable Development Goals

兵庫県立大学
S D G s 推 進 室 サイト

